

知ってますか
技術の

あれこれ

12

工学の源流を探る(5)

産業界の基盤を支えた工手学校



三浦 基弘
MIURA Motohiro
大東文化大学講師

明治の実業教育

日本の工学教育振興は、官製の指導的技術者の養成に力点が置かれた。政府は1870(明治3)年に工部省を設け、その中に工部寮を設置し、青年技術者の育成に努めた。工部大学校はこの方針の具体化として生まれた。前回でも述べたが、明治の工業近代化は外国技術の導入に依存していた。当時の東京開成学校(後の東京大学)の招聘(お雇い)外人教師のひとりG.ワグネル(写真-1)は、文部卿に「凡ソ一國ノ富ヲ増進スルニハ、主トシテ工業ノ発達ヲ図ルベク、マズ低度工業教育ヲ盛ンニシテ工業上、最モ必要ナ職工長ソノ他ノ技術者ヲ養成シナケレバナラヌ……」という主旨の提言をした。この建議にもとづいて1874(明治7)年、東京開成学校内に速成教育の製作学教場(東京工業大学の源流)が設置された。



写真-1 Gottfried Wagener
(1831-1892)

この教場はわが国初の中等工業学校である。年齢18歳以上、30歳までの生徒50名に限って入学を許可した。製作学教場教則は5条から成っている。

「第一条 此教場ハ諸般ノ工職物品製造等各自其志ス所ニ依テ直チニ其事ニ就キ専ラ実

地術業ヲ学ハシム

第二条 入学ノ生徒ハ専ラ術業ヲ研究スト雖化学物理数学等ノ学ハ製作学ノ基本タルヲ以テ之ヲ予科トシテ其大略ヲ学ハサル得サルナリ

第三条 製作学ヲ分ツテ工作製煉ノ二科トス入学ノ生徒ハ其志ス所ニ随テ其科ニ入ルヲ得ヘシ

第四条 入学ノ生徒ハ期限四箇年トシテ予科三級ヲ二年間本科一級ヲ二年間ニ卒業スルノ目的アルヘシ但予科三級ハ各七箇月ノ課程トス本科一級ハ二箇年ノ課程トス

第五条 生徒毎級ノ終ノ試業ヲ経テ登級ヲ許スヘシ」。

日課は毎日5時間の授業で、週に6日間行った。しかし、卒業生を2回出しただけで、1877(明治10)年2月に廃止された。理由は、西南戦争による財政の逼迫と専門学科としての化学科および工学科に製作学教場のごとき卑近実用のを併置することは専門学校としての体面を得たるものではないということであった。

しかし、手島精一は「まだ世の中の人、工業の真意が分からない。ただ盲目的に工業は職工の仕事である。学問も何もない職工の為すべきことで、こんな事に金を費やすのは馬鹿げている、というような意見が多く、ついに廃止することになったのです」と嘆いた。1880(明治13)年の改正教育令で、初めて「職工学校」の名が登場した。この職工学校は専門学校とならんで、各府県の産業の生産力をたかめ、実業を盛んにするためであった。この教育令に拍車がかかったのは当時の文部大輔九鬼隆一が1878(明治11)年、